

《兔園策》攷：村書の研究

本田，精一
九州大学大学院文学研究科研究生

<https://doi.org/10.15017/25755>

出版情報：九州大学東洋史論集. 21, pp.65-101, 1993-01-25. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

《兔園策》

攷

——村書の研究——

本田 精一

はしがき

一 《兔園》とは何か

二 《兔園策》の確定

三 《兔園策》の終末

四 《兔園策》の系譜

むすび

はしがき

古来中国に於ては商業は末業とされ、商人は「士農工商」の伝統的序列の下でその社会的地位は低く、その経済的力とは裏腹に賤視差別されて来た。それは唐宋以降の社会変化、特に経済の拡大発展に伴う商人の役割や財力の増大にもかかわらず依然として同様であった。(註①)

科擧制度は血統門閥に代えて漢字古典教育を社会の出世階段とし、能力次第で庶民から上層社会への進出を可能にしたが、商人とその子弟は『工商雜類』として制度上は科擧受験を禁止され排除された。(註②)

商人の社会的地位、世人の商人観、商人の自意識等に変化が生じるのは、更に社会経済が発展した明から清代とされる。

(註③)

元來『読み書き算盤』は商人に欠かせないものである。商人の出自は士人、僧、道等から転じたものもあり雑多であるが、その大部分は漢字古典の教育とは縁遠い庶民階層である。

彼ら是如何なる教育を受けたのか？ また知識人の教育との相違は？ 教育水準は？ 等々。こうした商人の教育の解明は、商人階層の社会的移動 (Social Mobility) 文化 (Culture) 心性 (Mentality) 及び職業理念 (Ideology) 等商人社会研究の基礎作業として有益であろう。

ところで教育の基礎は児童教育に在り、特に庶民階層はその職業的知識技能は別として、彼らの成人後の教育教養水準は概ね児童啓蒙教育期に形成される。一般に教育は教材、課程、組織、制度等各面からの研究を必要とするが、ここでは先ず教材を取り上げることにし、庶民児童の教材である所謂村書について考察することにした。

五代から宋代初期に農村児童の「村書」として盛んに使用され、その後何故か廃れて消え去った《兔園策(冊)》という書物がある。また同名の《兔園策》と呼ばれる別書の文集があり、更に類似名称の《兔園策府》という書物もあった。これら一群の書物には五代の宰相馮道の話が関連して、その撰者、内容について論議が混沌としている。(註④)

本稿は、これを教材史の問題として採り上げ、第一にこれらの論議を史料的に整理して「村書」《兔園策》はその中のどれであるかを確定し、第二にその流行した「村書」が何故に使用されなくなり消えたかの理由を明らかにし、第三にその内容を考察してそれが初級教材ではなく、児童のその後の職業生活や処世上必要とする知識習得の高級「村書」であることを確かめ、更にそうした高級「村書」は、その後宋代の《幼学須知》明代から流行し清末民国初期まで使用された《幼学故事瓊林》等の一連の系譜として存続し、庶民児童の教育に重要な役割を演じ、ひいては庶民の社会、文化の形成に密接に関連していたことを考察したものである。

一 《兔園》とは何か

南宋の陸游はその《劍南詩稿》に於て、しばしば当時の農村児童の教育情景に触れている。卷三十八に次の如き詩がある。

舍北野望

溪約通西嶺 山蹊繚北村。殘霞明水面、落葉擁籬根。
野父編龍具、樵兒習兔園。吾今井蛙耳、敢復慕鵬鯤。

これは郷里山陰に於ける慶元四年冬（一一九八）の作詩であり、農村生活の素描の中に、未だ完全には捨て切れない中央への復帰の気持ち添えたものと解される。（事実四年後嘉泰二年七十八歳で再出仕することになる）

陆游はこの他《劍南詩稿》に於て、農閑期以外就学出来ない児童を対象に冬季間のみ開設する小学校について、卷二十五「秋日郊居」の自註で「農家十月乃遣子入学、謂之冬学、所讀雜字百家姓之類、謂之村書」とし教材としての《雜字》《百家姓》を所謂「村書」として挙げてゐる。

《雜字》とは事物の名称を示す字句集で、例えば「手」「脚」「身」「眉」等の一行四文字を四百字程度を挿絵入りで掲載し理解記憶させる初歩的識字教材であり、《百家姓》は四百余の姓を四言韻語、例えば「越錢孫李」「周吳鄭王」「馮陳褚衛」「蔣沈韓楊」の如く並べて習得させる字句集である。⑬⑭

尚卷五十七「野歩至近村」に於て「耳目康寧手足輕、村墟草市遍經行。

孝經章里觀初学、麦飯香中喜太平。」

として《孝經》が教材として使用されたことが分かる。ただしそれが農村地帯に常設された郷校、家塾、村学でのことであり、冬学に於ても使用されたかは疑問である。

樵兒が学習していた《兔園》とは何であるか？

兔園という言葉自体は、漢の孝文帝の次子、梁の孝王が築いた苑の名称である。王應麟の《玉海》は次ぎの如く解説している。

『史記梁孝王築東苑、方三百里、是曰兔園。枚乘有梁王兔園賦、修竹檀欒夾池水、旋菟園並馳道。文選雪賦、梁王不悅、遊於兔園。』注、西京雜記曰、梁孝王好宮室苑囿之樂、築兔園。卷一百七十一 宮室 苑囿 園

翟 灝（清 仁和人 字晴江、乾隆進士）はこの兔園に由来して農庶民が学習する書物を兔園冊子と総称するとしている。『類書謂、梁孝王圃名兔園。王卒、帝以園令民耕種、籍其租以供祭祀。其簿籍皆俚語、故鄉俗所誦云兔園冊子。此文未

知何出。』《通俗篇》卷七

ところが他方、五代から宋代初期に《兔園冊》《兔園策》との具体的書名で呼ばれる書物が存在し、「村書」として盛んに使用されていた。

『北中村野多以兔園冊教童蒙』（《北夢瑣言》卷十九）

『兔園冊者、郷校俚儒教田夫牧子之所誦也。』（《新五代史》卷五十五）

『兔園策十卷。右唐虞世南撰。（中略）至五代時、行於民間、村野以授學童。』（《郡齋讀書志》卷十四）

樵児が手にしていたのは《雜字》《百家姓》の類であり、それを「村書」の一般的呼称である兔園としたのか、或いは具体的書物である《兔園冊》乃至《兔園策》であったか果たしていずれであろうか？

もし樵児の手にしていた《兔園》が現実の《兔園策、冊》であったならば、五代北宋初期に北方地域の村書として流行し、その後消滅したかに思える児童啓蒙書を南宋期の江南紹興地域の農村児童が学習していることになる。児童教育教材研究上実に興味ある新事実としなければならぬ。しかし、陸游の農村風景の描写は的確とはいえ、この《兔園》を以て直ちに五代盛行の村書《兔園策、冊》が使用されていた裏付けにすることは出来ない。従って、この樵児の《兔園》は矢張り「村書」の代名詞と解釈するのが順当であろう。

ところで、兔園の名を冠する一群の書名、即ち《兔園策》《兔園冊》《兔園策府》《兔園冊府》《兔園冊子》といった類似た名称が文献上散見される。

文献史料として、《北夢瑣言》《旧五代史》《新五代史》《郡齋讀書志》《困學紀聞》《書言故事》《文献通考》《宋史》《通俗編》《玉井山館筆記》《観堂集林》について見ることにする。その際に整理のための検討項目を次ぎのとおり設定する。

①書名の問題（略号【書】とする）

当該書名は下記のいずれを用いているか。

《兔園策》《兔園冊》《兔園策府》《兔園冊子》

②馮道との関連故事の問題（略号【馮】とする）

五代の高名な馮道を、彼の出自と風貌に村書である《兔園冊、策》を結び付けて、朝臣が嘲った故事の記載の有無。

③ 撰者の姓名の問題 (略号【名】とする)
撰者を確定しているか否か。

④ 啓蒙教材である村書としての問題 (略号【村】とする)
村書として使用の記述の有無

⑤ 内容の問題 (略号【内】とする)
文、字體、卷数その他内容に関する記述の有無。

⑥ その他特記すべき事項 (略号【特】とする)

(一) 孫光憲《北夢瑣言》 卷十九

「宰相馮道形庸陋。一旦為丞相、士人多竊笑之。劉岳與任贊偶語見道行、而復顧贊曰、新相廻顧何也。岳曰定是忘持兔園冊來。道之鄉人在朝者聞之告。道因授岳秘書監、任贊授散騎常侍。北中村墅多以兔園冊教童蒙。以是譏之。然兔園冊乃徐庾文體、非鄙朴之談。但家藏一本。人多賤之也。」

①【書】兔園冊

②【馮】有 任贊と劉岳 特に劉岳の言

③【名】無

④【村】有 北中村墅多以兔園冊教童蒙

⑤【内】有 徐庾文體、非鄙朴之談

⑥【特】有 現物確認。家藏本として普及しているが世人は賤視している。

(二)《旧五代史》卷二百二十六 周書十七 列傳第六

「有工部侍郎任贊、因班退、與同列戲道於後曰、「若急行、必遺下兔園冊」。道知之、召贊謂曰「兔園冊皆名儒所集、道能諷之。中朝士子止看文場秀句、便為舉業、皆竊取公卿、何淺狹之甚耶」。贊大愧焉。」

①【書】兔園冊

②【馮】有 任贊が発言

- ③【名】無
- ④【村】無
- ⑤【内】兔園册皆名儒所集 馮道の言
- ⑥【特】無

(三)《新五代史》卷五十五 雜傳第四十四 劉岳

「宰相馮道世本田家、狀貌質野、朝士多笑其陋。道旦入朝、兵部侍郎任贊與岳在其後、道行數反顧、贊問岳「道反顧何為」岳曰「遺下兔園册爾。」兔園册者、郷校俚儒教田夫牧子之所誦也、故岳舉以誚道。道聞之大怒、徒岳秘書監。」

- ①【書】兔園册
- ②【馮】有 劉岳の発言
- ③【名】無
- ④【村】有 郷校俚儒教田夫牧子之所誦
- ⑤【内】無
- ⑥【特】無

(四)晁公武《郡齋讀書志》卷第十四

兔園第十卷

右唐虞世南撰。奉王命、纂古今事為四十八門、皆偶麗之語。至五代時、行於民間、村野以授學童、故有「遺下兔園策」之誚。」

- ①【書】兔園策
- ②【馮】有 故事として引用
- ③【名】有 唐 虞世南
- ④【村】有 村野以授學童
- ⑤【内】有 十卷 纂古今事為四十八門
- ⑥【特】藏書の一つとして現物を確認している。

(五)王應麟《困學紀聞》卷第十四

「兔園策府三十卷。唐蔣王惲令僚佐杜嗣先做應科目策。自設問對引經史、為訓註。惲大宗子、故用梁王兔園名其書。馮道兔園策、謂此也。」

- ①【書】兔園策府
- ②【馮】有（間接的）
- ③【名】有 杜嗣先

- ④【村】無
- ⑤【内】有 三十卷。應科目策。自設問對引經史、為訓註。
- ⑥【特】馮道兔園策、謂此也。

(六) 胡繼宗《書言故事》書史類
『鄉校教田夫牧子、所謂兔園冊』

- ①【書】兔園冊
- ②【馮】無
- ③【名】無

- ④【村】有
- ⑤【内】無
- ⑥【特】無

(七) 馬端臨《文獻通考》
『兔園策十卷』

晁氏曰唐虞世南撰。奉王命纂古今事為四十八門、皆偶麗之語。至五代時、行於民間村塾以授學童。故有遺下兔園策之語。

- ①【書】兔園策
- ②【馮】有
- ③【名】有 唐 虞世南

- ④【村】有
- ⑤【内】十卷 纂古今事為四十八門。偶麗語。
- ⑥【特】全文《郡齋讀書志》引用

(八) 《宋史》藝文志七、八

(イ) 第二百八 志第一百六十一 藝文 七 別集類一千八百二十四部中的一書として在る。

『杜嗣先 兔園策 十卷』

- ①【書】兔園策
- ②【馮】無
- ③【名】有 杜嗣先

- ④【村】無
- ⑤【内】有 十卷 別集類
- ⑥【特】後出の三十卷本と別分類であること。
別集であり三十卷とは別書。

(口) 卷二百九 志第一百六十二 藝文 八 文史類九十八部、六百卷中の一書。
『杜嗣先 兔園策府 三十卷』

- ①【書】兔園策府
- ②【馮】無
- ③【名】杜嗣先

- ④【村】無
- ⑤【内】有 三十卷 文史類
- ⑥【特】十卷本との相違。文史類。

(九) 翟灝《通俗編》卷七

『兔園册子「五代史劉岳傳」馮道本田家、朝士多笑其陋。且入朝、任贊劉岳在其後、道行數反顧、贊問岳何為、岳曰遺下兔園册耳。兔園册者鄉校俚儒教田夫牧子、之所誦也。
「按」類書謂、梁孝王圃名兔園。王卒、帝以園令民耕種、籍其租以供祭祀。其簿籍皆俚語、故鄉俗所誦云兔園册子。此文未知何出。

晁公武讀書志云、兔園册十卷、唐虞世南撰、纂古今事四十八門、皆偶麗之語。
至五代時行於民間村塾、以授學童。故遺下兔園册之誚。』

- ①【書】兔園册子
- ②【馮】有
- ③【名】唐 虞世南

- ④【村】有
- ⑤【内】十卷 纂古今事四十八門 皆偶麗之語
- ⑥【特】新五代史劉岳傳 類書 郡齋讀書志引用

(十) 許宗衡《玉井山館筆記》

(清) 上元人 字海秋 咸豐進士 官至起居注主事

劉岳、任贊。譏馮道忘持兔園冊。誠為輕薄。然兔園冊乃徐庾文體、今士大夫於徐庾文體多有不知者、是並不能兔園冊譏之。不学而牆、斯為甚矣。

兔園冊府三十卷、唐蔣王惲、令僚佐杜嗣先、做應科目策、自設問對、引經史為訓註。惲太宗子、故用梁王兔園其書。而晁公武以為虞世南撰、有四十八門、皆偶麗之語、至五代時、行於民間、以授學童。五代史劉岳傳、馮道本田家、故岳與任贊、以兔園冊為田夫牧子所誦、借以譏道。此困學紀聞集證所據。余考北夢瑣言、則以兔園冊、乃徐庾文體、又言道怒、因授岳秘書監、任授散騎常侍。且謂道形神庸陋、一旦為丞相、而兔園冊村墅多以之教童蒙、故譏之也。」

①【書】兔園冊 兔園冊府

④【村】有

②【馮】有

⑤【內】徐庾文體。四十八門。

③【名】杜嗣先 または 虞世南

⑥【特】兔園冊と兔園冊府を同一視

(十一) 王國維《觀堂集林》 卷二十一

「兔園策府

杜嗣先撰 伯二五七三 鳴沙石室佚書影印本(第四冊)

右唐杜嗣先兔園冊府殘卷、僅存序文之半。案此書旧唐書經籍志與唐書藝文志均未著錄、惟宋史藝文志有杜嗣先兔園策府三十卷。五代史劉岳傳云、

「宰相馮道、世本田家、狀貌質野、朝士多笑其陋。道旦入朝、兵部侍郎任贊與岳在其後、道行數反顧、贊問岳道反顧何為。岳曰遺下兔園冊耳。兔園冊者鄉校俚儒教田夫牧子所誦也。」

困學紀聞云、「兔園冊府三十卷、唐蔣王惲令僚佐杜嗣先做應科目策、自設問對、引經史為訓註。惲太宗子、故用梁兔園名其書、馮道兔園策謂此也」則此書盛行於五代、或至宋季尚存、故深寧尚能言之歎。然宋時藏書家穿有是書、惟晁氏郡齋讀書志有兔園冊十卷、云「唐虞世南奉王命纂古今事為四十八門、皆偶麗語。五代時行於民間、村塾以授學童、故有遺下兔園冊之誚」據此、五代村塾盛行之書、為虞為杜、殊未可知。竊疑世南入唐、太宗引記室、則與房

元齡对掌文翰、未必令撰此等書、豈此書盛行之際、或并三十卷為十卷、又以世南有北堂書鈔、故嫁名於彼歟。此本雖僅存卷首、然猶是貞觀時寫本。序中「劉君詔問、皆願治之言、」治字未闕筆、知尚在太宗時。又案旧唐書太宗諸子列傳蔣王憚以貞觀七年為安州都督、至永徽三年徐梁州都督、在安州凡十六年、則成書當在安州、而此本乃書成後即傳写者。雖斷璣尺羽、亦人間瑰寶也。

①【書】 兔園策府並びに 兔園冊の二書を論じている。

②【馮】 有

③【名】 《宋史芸文志》及び《困學紀聞》では、《兔園策府三十卷》は杜嗣先の作であり

《郡齋讀書志》に拠れば《兔園冊十卷》は虞世南としている。

そこで五代村塾盛行之書は虞世南の作であるか、杜嗣先の作であるかはまだ決定しかねるとする。

④【村】 有

⑤【内】 無

⑥【特】 イ. 《宋史 藝文志 七》の「杜嗣先 兔園策 十卷」に言及していない。

口. 杜嗣先の兔園策府が、五代に村書として盛んに使用された際に三十卷を十卷に編集し、兔園冊 十卷としそれに《北堂書鈔》の撰者である虞世南の名を撰者として転嫁したのではなからうか？ との推論をしている。

ハ. ペリオ二五七三号に拠る。

以上を一括整理すると次ぎのとおりとなる。

文 献	書 名	馮道故事	撰者姓名	村書	内 容	特 記
北夢瑣言	兎園冊	有	無	有	徐庾文體 非鄙朴之談	家藏一本 人多賤之也
旧五代史	兎園冊	有	無	無	皆名儒所集	無
新五代史	兎園冊	有	無	無	無	無
郡齋読書志	兎園策	有	虞世南	有	十卷 纂古今事為四 十八門 偶麗之語	現物確認
困学紀聞	兎園策府	有	杜嗣先	無	三十卷 應科目策。 自設問対引經史。為 訓註。	馮道兎園策 謂此也。
書言故事	兎園冊	無	無	有	無	無
文献通考	兎園策	有	虞世南	有	十卷 纂古今事為四 十八門	郡齋読書志 引用
宋史七志	兎園策	無	杜嗣先	無	十卷 別集類	三十卷本とは別書
宋史八志	兎園策府	無	杜嗣先	無	三十卷文史類	十卷本とは別書
通俗編	兎園冊	有	虞世南	有	十卷四十八門	類書引用 兎園冊子を村書の呼 称とす
玉井山 館筆記	兎園冊府	有	杜嗣先 虞世南を併 記*	有	三十卷	※冊と冊府を同一視
觀堂集林	兎園策府 兎園冊	有 有	杜嗣先 虞世南	有 有	三十卷 十卷	○村書の撰者杜虞い ずれとも未決 ○杜嗣先三十卷を十 卷に再編し虞世南 の名を転嫁の推論 ○宋史志藝文七杜嗣 先十卷本に言及せ ず

二 《兔園策》の確定

前述の文献史料に據り更に検討を進め、村書《兔園策》はこれらの中でどれであるかを選別して確認することにした。先ず書名について撰者を明記しているものを挙げると次のとおりである。

- | | | |
|--------|----------|-----------|
| ① 兔園策 | 虞世南 | 《郡齋讀書志》 |
| ② 兔園策府 | 杜嗣先 | 《困学紀聞》 |
| ③ 兔園策 | 虞世南 | 《文献通考》 |
| ④ 兔園策 | 杜嗣先 | 《宋史 藝文志七》 |
| ⑤ 兔園策府 | 杜嗣先 | 《宋史 藝文志八》 |
| ⑥ 兔園冊 | 虞世南 | 《通俗篇》 |
| ⑦ 兔園冊府 | 杜嗣先虞世南併記 | 《玉井山館筆記》 |
| ⑧ 兔園策府 | 杜嗣先 | 《觀堂集林》 |
| ⑨ 兔園策 | 虞世南 | 《觀堂集林》 |

書名の【冊】は即【策】として《兔園策》に統一し、⑦は撰者を単に併記しているので除外して整理すると次ぎの三つに分類される。

- | | | |
|----|-----------------------|------|
| A類 | 書名が兔園策で撰者を虞世南であるとするもの | ①③⑥⑨ |
| B類 | 書名は同じく兔園策で杜嗣先の撰とするもの | ④ |
| C類 | 書名が兔園策府で撰者を杜嗣先とするもの | ②⑤⑧ |

即ち、《兔園策》は虞世南撰と杜嗣先撰の二種類が存在したことが確認され、《兔園策府》は杜嗣先の撰書であることが確認されるのである。

杜嗣先の《兔園策》について述べると、杜嗣先なる人物の経歴は唐の太宗の子である蔣王憚の僚佐であった以外は一切不明である。唯太宗との関係からすると、当時房玄齡と共に重用され良相と並び称された杜如晦の一族であったことも考えられるが、これは憶測にすぎない。

記載されている《宋史 藝文志七》であるが、『宋史藝文志は宋の《秘書書目》《中興館閣書目》《中興館閣書目》を利用している。だから、それらは、現実はどこかの図書館に存在した書物の目録なのであって、学問の分類と共に、書物を収蔵するときの便宜をも考えた実用性をも持っていた。』(註⑥)とされ、その限りに於て確証されている書物と言えよう。別集類に区分されているので杜嗣先個人の詩文集十巻であったと考えられ、村書として使用されたり、馮道の記事に関連する書物ではない。

虞世南の《兔園策》については、『郡齋讀書志』が原史料であり、『文獻通考』《通俗編》《觀堂集林》は皆引用している。十巻であることと古今の事物を四十八に分類して記述しており、文體は偶数の華麗なものであるとしている。

啓蒙教材の特徴は第一に諸種の事物、姓名、故事等を記述し、第二に音読して暗記するに容易なように、偶成対句、正反相照等文字の配列に工夫をしていることである。第三には識字機能と事物、故事、成語等の基礎知識学習機能を兼ねていることである。虞世南の《兔園策》はこうした啓蒙教材の適性を充足していると言えよう。

杜嗣先の《兔園策府》は、鳴沙石室出土の写本残片によりその存在は實証され、また《宋史 藝文志八》により文史類の三十巻として確認されるところである。

《困学紀聞》は蔣王の指示による作成の経緯及び科擧の想定試験問題集であり、設問とそれに対しての経書史書からの引用による解答と併せ訓註を付けたものであることを記している。更に王が作成を指示したところから梁王の故事にあやかり兔園の名を書名としたこと並びに馮道の兔園策はこの書物であると明記している。この限り教材としては、科擧受験のエリート子弟を対象とするものであり、田夫牧子対象の啓蒙教材ではない。

以上の如く、杜嗣先《兔園策》、虞世南《兔園策》、杜嗣先《兔園策府》はそれぞれ別個独自の書物であり内容及び用途も

自ら相違していたことが判明する。

次に撰者の姓名のない兔園冊の整理をする。《北夢瑣言》《旧五代史》《新五代史》《書言故事》は、共に書名を兔園冊としているが撰者を記述していない。

北夢瑣言の撰者 孫光憲は五代荆南の高季興の臣下で、後に宋の太祖に仕えた五代宋初期の人である。自身で写本したほどの凶書蒐集家であり北夢瑣言の史料的价值は高い。彼は次ぎの如く述べている。

「宰相馮道は容貌精神が卑しい人物である。ひとたび丞相となると多くの士人は竊にこれを笑った。劉岳と任贊は、馮道の動作を見ながら二人であれこれ言っていた。馮道がまた振り向くので贊は「新宰相は一体何を見回しているのかな。」と言ったところ、岳は「きつと兔園冊を持って来るのを忘れたに違いない。」と言った。

朝廷に勤務していた馮道の同郷の者が、このことを聞いて馮道に報告した。馮道はそこで岳に秘書監、任贊に散騎常侍の職を授け左遷した。

北部地方の田舎では兔園冊を使って幼い児童を教育している。このことを根拠として、馮道の動作を非難したのである。

しかし、兔園冊は北周の徐陵と庾信との文體であり、広く全体にわたって論じているのは田舎じみっていて粗野な事柄ではない。

家に蔵書として一本を所有しているが、多くの人はこの書物を賤視している。」

馮道が農家村儒の出自で風采のあがらないことを理由にしての、士人たちの反感が根強いものであり、遺下兔園冊之誚の故事である劉岳、任贊による馮道への兔園冊に事寄せての揶揄とそれを聞いた馮道の措置を述べている。北部の農村地帯では兔園冊を教材にして児童の啓蒙教育をしていることを明記している。馮道は河北景城の出身で家は代々農家であり田舎儒者である。兔園冊が村書であり卑俗低級であると、馮道の出自風采に結び付けてのことであったとしている。孫光憲の見

るところでは、兎園冊の文章は綺麗な文體であり、論じているのは広く諸般にわたり田舎じみた粗野な内容ではない。多くの人が蔵書としているが、書物としては軽蔑していると説明している。

孫光憲は当然現物を確認している筈であるが、何故か撰者名をあげていない。その理由は兎園冊が、元來撰者不詳の所謂無名氏の撰書であったと考えるのが自然であり納得される場所である。

以上を勘案すると孫光憲記述の兎園策は、まさに五代盛行の村書である兎園策に外ならない。特に無名の人物の撰書である点は重要であり、それは書物としての評価にも関係するが、村書兎園策の成立の原型を推定するうえで一つの手懸かりとなる。

旧五代史は馮道の言を挙げて重要な示唆を与えてくれる。

「工部侍郎の任贊という人物がいた。列んで退出していた際に、馮道が遅れて出てくるのを見て同列の者に、「急いでいる様子からするときつと兎園冊を落としたのに違いない。」とざれ言をいった。

馮道はこれを知って任贊を召して、「兎園冊は多数の優れた儒者の説を集大成した書であり、自分はこれをそらんずることが出来る。朝廷の官職にある人々は文章上の秀句を見るに止め、科擧の勉強の便宜とし、高位高官の職を盗み取っている。浅薄で狹量なもの甚だしいではないか。」といった。任贊は大いに慚愧するところがあった。」

馮道によれば兎園冊は名儒の説を集大成した書であるのに、それを科擧受験の便覧としてしか読んでいない朝士が高官になつてゐるのは問題外であり、そこで痛烈な一言となつた。

この兎園冊は正に杜嗣先撰の兎園策府に外ならないと考えてよい。このことは王應麟が《困學紀聞》に於て『兎園策府三十卷。唐蔣王惲令僚佐杜嗣先倣應科目策。自設問対引經史、為訓註。惲大宗子、故用梁王兎園名其書。馮道兎園冊、謂此也。』としてゐることに符合している。旧五代史の兎園冊は兎園策府である。

新五代史は旧五代史の記述と異なり、馮道を誹謗した主役は劉岳となつてゐる。兎園冊については、『兎園冊は郷校の田舎儒者が農夫牧童に授業する際、音読して説明し生徒に暗誦させて教えた書物である。』としてゐる。

この農夫牧童を対象にして音読して暗記させるという記述は、その教材である書物が例えば《蒙求》の如く文体は四言の韻文で、内容は事物や故事の類である農夫牧童の啓蒙書であり、村書《兔園冊》と考えられる。

書言故事は「農村の学校で農夫牧童を教育するのに、兔園冊を声を出してそらんじさせる。」とし、兔園冊が村書であることとその文体内容が音読暗記するに適したものであることを示すに止まる。

これまでに見て来た如く、杜嗣先の兔園策府三十卷、同兔園策十卷、並びに孫光憲の《北夢瑣言》無名氏撰兔園冊及び晁公武の《郡齋讀書志》の虞世南の兔園第十卷の四書は文献史的観点からそれぞれ別書としての存在は確実なものと考える。杜嗣先の兔園策府三十卷は經史引用の科擧受験用便覧であり、兔園策十卷は詩文集であつていずれも啓蒙教材の範疇外と考えられる。(註⑦)

そこで残るのは、無名氏撰兔園冊と虞世南撰兔園策の二つである。孫光憲は五代北宋初期の人で乾德年間（九六四―九六八）没、晁公武は宋徽宗崇寧年間（一一〇二―一一〇六）生、紹興二年進士、孝宗淳熙年間（一一七四―九〇）没の人であり、両者の年代的隔たりは約二百年である。両者共に読書家、藏書家として著名であり、それぞれの兔園冊及び兔園策の解説は信頼して然るべきものである。

これらを勘案し孫光憲《北夢瑣言》の無名氏撰兔園冊並びに晁公武《郡齋讀書志》の兔園策の二書を五代流行の村書であると判定するものである。

それならば両者の関係はどうであろうか？ 同一書なのか？ 別書なのか？

《北夢瑣言》

「北中村墅多以兔園冊教童蒙。以是譏之。然兔園冊乃徐庾文體、非鄙朴之談。但家藏一本。人多賤之也。」

《郡齋讀書志》

「兔園策十卷。右唐虞世南撰。奉王命、纂古今事為四十八門、皆偶麗之語。至五代時、行於民間村野以授學童、故有「遺下兔園策」之諺。」

共通点であるのは

- ① 名称が同一の児童用啓蒙書であること。
- ② 文體は綺麗であり音読暗記に適している。
- ③ 前者は広く物事を論じて卑俗な内容でないとし、後者は古今の事物を四十八の分類をして取り扱っているとして

相違点は

- ① 前者は撰者不明、後者は虞世南と明記している。
 - ② 記述に約二百年弱の時代差がある。
- これらを勘案した場合同一書である公算が大であると思料するもの、それ以上の文献的確定による断定は現在時点遺憾ながら出来ない。

敢えて一つの推論をすれば、無名氏撰の《兔園策》が村書として盛んに使用され普及する間に、出版業者の手によって虞世南の名が冠され、その刊本を晁公武が蔵書としていたことはかなり可能性が高いと考える。また別の見方として晁公武が内容を考証した結果、虞世南の《北堂書鈔》が底本であるとして、撰者としたこともあり得る。

そこで両書が同一の村書《兔園策》であると仮定して、佚書である《兔園策》を輪郭のみであるが復元を試みた。

【書名】 兔園策（冊）

杜嗣先の《兔園策府》を意識して、それに因んだ名称であろう。

【撰者】 無名氏

晁公武はこの書は虞世南が王命を奉じて編纂したとするが、王國維は唐の太宗がそのことを命じた事実はないと否定している。撰者名を記述せず且つ何故か人が賤視するとした孫光憲の言をより重視し無名氏の撰とする。無名の儒者が自作でなく児童啓蒙書、類書の中から適宜採択して編纂したと考える。

【内容】十卷本である。当時の刊本からすると本文総字数は七、八千から一萬字であろう。文章は梁代の綺麗な文體、偶数語で書かれている。

内容は古今の事物、典故、成語を四十八に分類している一種の類書である。

《急就篇》《凡将篇》等の啓蒙類書、歐陽詢の《藝文類聚》虞世南の《北堂書鈔》等を底本としたものと考えられる。

四十八門の分類については推定の範囲外であり以下若干の例を参考までに列挙するに止める。

《北堂書鈔》唐 虞世南

帝王、后妃、政術、刑法、封爵、設官、禮儀、藝文、樂、武功、衣冠、儀飾、服飾、舟、車、酒食、天、歲時

十八部

《小學紺珠》南宋 王應麟

天道、律歷、地理、人倫、性理、人事、藝文、歷代、聖賢、名臣名士、氏族、職官、制度、器用、飲食、敬戒、動植

十七類

《幼學故事瓊林》明 程登吉

天文、地輿、歲時、朝廷、文臣、武職、祖孫父子、兄弟、夫婦、叔姪、師生、明友賓主、婚姻、女子、外戚、老壽幼誕、身体、衣服、人事、飲食、宮室、器用、珍寶、貧富、疾病死葬、文事、科第、製作、技芸、訟獄、釈道鬼神、鳥獸、花木

三十三

《增訂幼學須知雜字采珍大全》清

天文、地理、字令、人物、歲壽、文官、武職、仕官、士業、農業、百工技芸、商賈、山海異類、番國、身体、病症、人事、婚姻、喪祭、冠冕衣服、女工、糸布、綵色、數目、訟獄、宮室、釋道、木器、鐵器軍器、寶貝、雜貨、花草、竹木、藥材、五穀、蔬菜、菓子茶料、茶酒油、葷食、素食、飛禽、走獸、鱗介、昆蟲、漁獵、船隻、通用、俗語四十八類

《改良繪圖幼學雜字》付録《四言使讀》清

天文、地理兼宮室、時令、身體、人事、衣服、首飾、文事、武備、婚姻、布帛銀色、五穀、菜蔬、醬貨、糖食、花木兼果品、鳥獸兼魚蟲、飲食兼飲酒、雜貨、百藝、起蓋、農商

二十三門

右が推定される佚書《兔園策》の輪郭である。真に臆げなもので殆ど体を成さないが、現在時点遺憾ながらこれを限界とせざるを得ない。

ところで《兔園策》が何故に村書として普及し流行したか？その啓蒙教材としての特徴乃至役割は何であつたかを五代、宋代初期の初級教材と社会情勢を念頭に置きながら考察しよう。

先ず当時使用されていた初級教材を概観すると、漢代からの《凡将篇》《急就篇》、梁代の《千字文》、唐代の《蒙求》が一般的に使用されていた。《急就篇》は史游の撰。四卷三十四章から成り、氏族、事物を列記している。各章三言六十三字、但し第三十三、四章の二章は、四言六十四字で本文総字数二千四百四十四字である。《凡将篇》は司馬相如の撰。これは佚書で詳細不明である。(註⑧)

《千字文》は一卷。梁の周興嗣の撰。四言古詩二百五十句、『天地玄黄、宇宙洪荒』以下重複なしの総字数一千字から成る。《蒙求》三卷。唐の李翰の撰。上代から南北朝ままでの故事を四言韻語五百九十六句、総字数二千三百八十四である。『孔明臥龍・呂望非熊』、『蕭何定律・叔孫制礼』の如く類似の事項を一对にして記憶に便にしている。中唐から五代、北宋にかけて初等啓蒙教材として最も使用された。

唐帝国の滅亡、分裂、社会秩序の崩壊等、一見戦乱興亡に明け暮れた五代であるが、その反面、各地域毎の産業興隆と相互間の商業交易の発展があり、農村人口の流出、職業の多様化、人口の推移による社会の地域的並びに階層的变化、文化面では印刷技術による宗教書術書の出版等があり、新しい時代への開幕時期であつた。

農庶民階層といえども田賦等官憲との交渉、土地取引、商取引、冠婚葬祭その他新時代に対応しての社会生活上での知識を必要とし、特に農村から流出して商工業等に従事する者はそれを必須とするに到つた。

こうした傾向は北宋期に入ると益々強くなり、庶民層の生活手段としての識字の必要性は一段と高まつた。(註⑨) 五代末から北宋期の最も一般的児童教材である《千字文》は字数重複なしの一千、《蒙求》は字数二千三百八十四である。これ

では不十分でより識字数を多くし、成語典故も豊富な処世上の常識が習得出来る啓蒙書が必要される状況が到来したのである。

村書《兔園策》はまさにこの種の需要に対応するものであり、しかも印刷技術と出版業はこれを村書として普及させるに十分な段階にあった。

三 《兔園策》の終末

五代北宋期に村書として流行した《兔園策》であるが、その後は一体どうなったのであろうか？それ以降の時期に《兔園策》が村書として使用されていることを示す文献は、遺憾ながら今のところ見いだし得ない。また書目については、史料とした晁公武の《郡齋讀書志》と共に現存する著名な個人の蔵書目録である陳振孫の《直齋書錄解題》には記載がなく、尤袤の《遂初堂書目》に於ては《兔園冊府》は類書として分類され存在するが、《兔園策》は記載されていない。南宋期以降の書目には見当たらない。

村書であるとして無視されるということもあるが、矢張り『至五代時、行於民間、村塾以授學童』の五代から北宋初期の期間に流行したものの、その後何らかの理由で使用されなくなり、佚書となったと考えられるのが妥当である。

その理由は先ず五代から統一王朝の北宋へ、更に南宋へと時代の変化が大きく内容が適合しなくなったとも考えられるが、事物、典故、成語等から構成される啓蒙書であることからそれが決定的なものとは思えない。啓蒙教材は一般的に息が長く、《千字文》《蒙求》等のごとく清末に及ぶものがある。何が《兔園策》を短命に終わらせたのだろうか？

書物特に啓蒙書に対する世人の評価は極めて重要である。唐代の《太公家教》はその内容にかかわらず宋代に於ても依然として評価され使用されていた。王明清（宋、字仲言、汝陰人、慶元間寓居嘉禾、官泰州倅）が次ぎのように述べている。

「世傳太公家教、其言極淺陋鄙俚。然見之唐李習之文集、至以《文中子》為一律。觀其中猶引周漢以來事、當是有唐村落間老校書為之。太公者猶曾高祖之類、非涓濱之師臣明矣。《文中子》想亦是唐所錄。其言未免疎略。經本朝阮逸為之潤色。所以辭達於理。學者宜熟究之焉。」

《玉照新志》卷三
即ち

「世に太公家教なるものがつたえられている。その文章は浅薄卑俗も甚だしい。然るにこれが唐の李習の文集では、隋の王通の《文中子》と同様なものとされている。周、漢からの事を引用しているが、これは唐の田舎の古老が書を校勘して作成したものに違いない。太公といつているのは、五世の祖、祖父の祖父であつて太公望でないのは明白である。《文中子》もこれは唐代に編纂したものと考えている。太公家教の文章は粗略であるが、本朝の阮逸が文章に色艶をつけ飾ることをした。それで文章が理に適うのである。学習するものは、ここのとこををよく研究すべきである。」としている。

《太公家教》の文章は『羅網之鳥、悔不高飛。呑鈎之魚、恨不忍饑。人生誤計、恨三不思。』或いは『當路逢尊者、側立其傍、有問善對、必須審詳。』等々であり、文章それ自体は四言句も混乱し俗語口語調も入っているが、全体としては流暢であり調子がよい。更に重要なのは話の筋が、宋代の人々の思潮に非常に適合し好まれた点にあつたと考えられるのである。

これに反し《兔園策》は既に流行書であつた当時から、孫光憲が述べている如く世人は何故か賤しんだ書物であつた。宰相馮道にたいする評価は時期により人により衆知の如く極端に相違する。北宋前期の薛居正（九一二―九八二）撰の《旧五代史》、真宗期に於ける王欽若（九六二―一〇二五）の奉勅撰書である《冊府元龜》は客観的に馮道を正しく評価している。北宋後期に入ると、《新五代史》の撰者歐陽修（一〇〇七―一〇七二）、《資治通鑑》の司馬光（一〇一―一〇八六）は、馮道が各王朝につかえて宰相の地位を保ち、それを誇りとしていたことをとらえ、節操のない恥知らずと非難し、これに反して王安石（一〇二一―一〇八六）は馮道の人民救済の努力を高く評価し、こうした正反対の評価が並存した。南宋以降は、世論の指導者である士大夫層は挙げて馮道を破廉恥な人物の典型とし、馮道に対する悪評が世論として定着した。村塾、私塾の教師はもとより学童の父兄もこうした風潮を当然に受け入れたであらう。

《兔園策》と馮道は『遺下兔園策之誚』の故事により密接不可分であり一体化している。馮道の評価は即《兔園策》に対する世評に外ならない。馮道の世評が極端に下落するにつれ、兔園策という言葉自体、書名自体が賤視どころか嫌悪感をもつて迎えられるようになったであらうことは容易に理解し得るところである。

かくして《兔園策》は内容の問題ではなくて、書名が馮道と結び付いたために、時代の思潮、世評により葬り去られ消え

て行く運命であったと考えられる。かくして村書《兔園策》は廃れ佚書となったのである。

ところで宋王朝の中国統一が成立すると、その平和主義、文治主義の下で経済、社会、文化は、五代の時期に比較して飛躍的に発展し変化した。商業の発展は全国的に諸産業を振興し、諸産業の発展は商業を益々拡大発展させた。江南下流域の新田開発や稲の品種改良による生産力増大は、江南地域を穀倉とし大運河による南北流通を拡大発展させ、米をはじめ生糸、茶、果物、魚、肉類、薬品、木材等の農林水産物の商品化、特産品化が進行した。絹織物、陶磁器、漆器、紙、墨、筆、硯等の文房具、美術工芸品、建築資材、出版物等の手工業もこれに並行して盛況を呈した。商業、手工業の発展、分業化は農家の兼業化と農村からの労働力を吸収し農村社会に大きな変化を齎した。経済的發展は草市、市鎮の発展や都市化現象を招来し、特に北宋の首都開封や南宋の臨安は所謂百万都市として殷賑を極めた。皇族、高級官僚、大地主、大商人等の富裕階層の奢侈品による贅沢な都市住民の消費水準の向上と講談演劇等の庶民文化の盛況の裏面では貧民流民の増加があり、貨幣經濟の發達と軍事費の増大に因る財政難に伴う増税は、特に中小地主を含む農村社会にその崩壊を齎した。農家の次男、三男は土地をはなれ他に職業を求めて生活をせざるを得なくなった。社会は階層的、地域的、職業的に大きく且つ多様に变化したのである。

教育文化に於ては本格的科擧制度が成立し、伝統的古典の学識教養による個人の才能が支配層としての官僚への登用基準となった。土大夫、知識人階層の形成とその社会的地位の確立が実現し、科擧受験のための教育は官僚、富裕な地主、商人等の子弟を対象に幼時から行われ、こうした教育重視の時流は、既述の社会変化による農民子弟の他業への就職、職業の多様化と相俟って、科擧とは無縁な一般庶民児童の教育にも波及した。

もっとも児童層の大多数である貧困な農民の児童は学習とは無縁であり、殆どが生涯を文盲で過ごすことになる状態が依然として続くことは同じである。読書人、士人、出仕を目指す児童は識字課程を早期に習了し、四書五經賦詩等の科擧に取り組むことになる。農庶民層の児童は、たとえ教育の機会に恵まれていた場合でもその多くは識字中心の教育であり、伝統的儒學教育を受ける児童とは内容が隔絶していた。

蘇東坡は学童時代を回想して次ぎのように述べている。「自分は数え年八歳で眉山の私立小学校に入学したが、道士の張易簡が先生であった。学童は百人近くいたが、先生は自分と太初という子が良くできるとほめていた。太初は眉山の商人の

子供である。自分は成長するにつれ学問の習得が進み、やがて進士としての勅題に合格した。しかし、太初は郡の下役人である胥吏になった。」

「吾八歳入小学、以道士張易簡為師。童子幾百人、師獨称吾與陳太初者。太初者、眉山市井人子也。余稍長學日益進、第進士制策。而太初乃為郡小吏。」（《仇池筆記》道士張易簡）

四川の田舎町眉山に於ても児童教育は盛んであり、小学と呼ばれる私塾は教師が道教の道士であり、約百人の学童が勉強していたこと。読書人である蘇洵の子で科學を目指す蘇東坡と科舉志望の有無は不明であるが商人の子が共に机を並べて勉強し、二人が成績優良児であったこと。その後蘇東坡は益々学習が進歩し科舉に合格するが、商人の子供である太初は郡の小役人になったこと等当時の教育状況と子供の進路を示す史料であり興味深い。

こうした社会環境であるから《兔園策》は消え去ったものの、それと同様な初級識字教材でない庶民児童向けの高級教材の需要は、高まりこそすれなくなることは考えられないのである。書名は異にしても第二の《兔園策》は存在した筈である。庶民児童教材の継続性、持久性を例示すると、代表的初級識字教材である《百家姓》の場合は次ぎのとおりである。源流は漢の史游の撰《急就篇》の姓字の列叙に始まり、南宋期に至り王應麟（一一二二—一一九六）の《姓氏急就篇》六卷は四百四十四の姓について詳細な解説をしている。これは知識人階層向けの教材であるが、これが「村書」となると清代の《百家姓》は四百四十二の姓を解説は一切無く羅列し、簡単な地名を下に付している。陸游が挙げた南宋期の村書《百家姓》もこれと同様のものであろう。

右の如く考えるならば、《兔園策》はその書名が世間に容れられず消え去ったものの、庶民児童用高級啓蒙教材に対する需要は益々高まる状況下、理由が理由で不人気になった流行書を出発業者としては放置しないところであろう。《兔園策》は名を変え形を繕ろって生き延びたと考えられる。

南宋の淳祐九年（一二四九）刊行の陳振孫の《直齋書錄解題》卷十四小学の部に、各種の《蒙求》類と並んで《幼學須知》五巻が記載されている。しかも陳振孫は「餘姚孫應符仲潛撰次。此書本書坊所為。以教小學。應符從而增廣之」としている。即ち、「この書物は元來書店が啓蒙教材として作成し販売していたものであり、それを孫應符が手を加え増補し編纂したものである」との解説を加えている。

明代の葉盛（一四二〇〜七四）の《葦竹堂書目》卷五の類書の部には、多数の啓蒙書の記載が目立ち、《居家必用》《啓札青錢》《啓札雲錦囊》等の家庭百科全書類が記載されているが、児童向けとしては各種の《蒙求》類、《對相識字》《幼學日誦格言》等があり、それらと並んで《幼學須知》一冊がある。同じ明代楊子奇の編書《文淵閣書目》卷十一盈字號第六廚書目に於ても同様に、《幼學須知》が《蒙求》類、《對相識字》《幼學日誦格言》《千文句解》等と共に記載されている。

管見によれば、これらの《幼學須知》は《兔園策》の後継書であり、後述する《幼學故事瓊林》とを結ぶ鎖である。勿論《兔園策》は佚書であり《幼學須知》も内容を確認し得ない以上、《兔園策》が書名のみの変更で《幼學須知》に変身したとは言えない。しかし、初級識字教材でない庶民児童用高級教材の系譜上の先行書であることは確実であり、また《幼學須知》が同じく『幼學』を冠する《幼學故事瓊林》の先行書であると比定しても間違いないであろう。

ここに庶民児童用高級教材の五代、北宋、南宋、元、明、清代と九世紀間を通じての流れ、即ち『兔園策の系譜』を見いだすのである。

四 《兔園策》の系譜

先ず宋代以降の児童教材を概観すると、庶民児童用として最も普及し村塾等で一般的に使用された初級児童教材としては次ぎのものがある。

① 《雜字》

《新鐫增補類纂摘要鰲頭雜字》《新刻釋義群書六言聯珠雜字》《新刻四言雜字》《對相四言雜字》等があるが、一例に洪武辛亥孟秋吉日金陵王氏勤有書堂新刊の《魁本對相四言雜字》について見ると、『天雲雷雨』から始まり四言に挿絵入りで字数二百二十二、『剗刀』『水盆』の如く事物の名称で名詞八十四字数百六十八、総字数三百九十二の字句集である。

② 《百家姓》

既述の如く單姓、複姓の姓四百数十字から成る識字用字句集である。

③ 《千字文》

既述の如く四言古詩二百五十句、重複なしの一千字の伝統的識字教材である。

④《三字經》

一卷。宋、王應麟撰。一説に区適子撰、黎貞の構成とする。南宋からの流行書。

『人之初、性本善、性相近、習相遠、』の如く毎句三字の韻文三百五十六句、総字数一千六十八である。一般的な事物や通俗的な歴史字事実等を包羅して、識字機能に加えてごく初歩的知識教育機能を併せた啓蒙書である。

以上が典型的『村書』であり、特に②③④は所謂『三、百、千』として庶民児童の基礎教材として民国初期まで盛んに使われた。

一方読書人を指向する児童の教育教材の概要を述べると、明代松江華亭の人、宋久夫の《宋氏家規》に『六歳即令讀書。先小学而後以次進入四書經史。八歳即令習字。先端楷而後以次進入篆隸草書。』とあり、六歳（現在の四〜五歳）になると朱子の《小学書》から始め、四書五經史書としている。

やや溯るが、元の程端禮の《程氏家塾讀書分年日程》三卷 綱領一卷 によれば、「八歳での入学以前に《性理字訓》を俗書の《蒙求》に代えて読ませる。入学後は、《小学書》正文。次いで《大学經傳》正文、《論語》正文、《孟子》正文、《中庸》正文、朱子の《孝經刊誤本》、《易》正文、《書》正文、《詩》正文、《儀禮》と併せ《禮記》の正文、《周禮》の正文、《春秋經》と併せ《三傳》正文と段階的に進める。八歳から六七年の学習により十五歳前に《小学書》《四書》諸經の本文は全部修了する。」としている。

この期間の読書の文字数は龐大なものとなる。錢泰吉《曝書雜記》卷上 記載の一例を引用すると『周易二萬四千二百七十字。書二萬五千八百字。詩三萬九千二百二十四字。禮記九萬九千二十字。左傳一十九萬六千八百四十五字。周禮四萬五千八百六字。論語一萬二千七百字。孟子三萬四千六百八十五字。孝經一千九百三字。』とあり、総計四十八萬一百九十字となる。

宮崎市定博士は四書五經の本文字数について、「論語一一、七〇五字。孟子三四、六八五字。易經二四、一〇七字。書經二五、七〇〇字。詩經三九、二三四字。禮記九九、〇一〇字。左傳一九六、八四五字。合計四三一、二八六字。四書のうち《大学》と《中庸》は《禮記》と重複するから数えないが、全部で四十三萬余字という、正に気の遠くなりそうな数字で

ある。」としている。(⑩)

教材字数の格差だけの観点からであるが、教育の体系が知識人と庶民とでは画然と区分され、両者の間には量質共に雲泥の相違があったことが窺える。

このおびたしい文字をおぼえ古典に通ずることは、想像を超える負担であるが、これらの文字を理解しその文字で書かれた文章を読むことのできる人は、いわば「選民」として重んぜられ、「読書人」の名のもとで社会的に優位な地位を占めた。彼らは科擧に合格して官途に就き、政治を運用して民衆を支配すると共に、特権を行使して商業への出資や土地を私有兼併することにより経済的にも有位な地位を確保した。こうした階層の人たちはその特権を子孫に継承させようとするのは自然であり、その子弟は科擧及第を目標に必死になって古典の学習に努力したのである。競争は激しく科擧に合格しないものも多数出たが、その場合でも彼らは読書人階層の一員として位置づけられた。科擧制度による官僚はいわば一代貴族であり官僚階層としては所謂「社会的移動」が見られ、新陳代謝が営まれた。(⑪)

また読書人といっても別に門閥血統ではなく、生家が読書人でない一般庶民階層からも古典教育次第で参入可能であるが、それは社会的地位の上昇意欲を持ち且つ古典教育に要する資力と才能に恵まれている場合で、例えば富裕な農民や商人の子弟等ごく限られたものであった。

漢字文化は社会を極めて少数の古典による文字を使用出来る人々とそうした文字には無縁の大多数の庶民に階層として二分し、更に書かれた言葉と話し言葉の通用範囲を嚴重に区別し、古典に即した文章のみを正式なものとして認めるという二重な面を持つ複雑な社会構造に作り上げた。

いうまでもなく文字は優れた情報手段であり、いつの時代でも情報は権力として作用する。人種、言語を異にする広大な中国に於て、支配階層は伝統的に政治、経済、社会、文化すべての分野で古典に即した統一的な文書を支配力として有効に利用し統治してきた。

被支配階層はこうした環境の下で生計をたて生活しなければならぬ。貧困な農民で読めない証書に爪印を押しして更に悲惨な境遇に落ちるものもある。庶民大衆としても生きるための手段としての最小限の識字能力の必要にせまられる。これが

「村書」《雜字》であり《百家姓》といった「冬學」の教材である。更に生活上の必要が庶民児童の高級教材である《兔園策》《幼學須知》であったことは既に詳述したところである。時代が明、清と下り社会、経済が大きく変化發展するに依りて、こうした庶民児童用の実用目的の高級教材の需要は確実に増大した。

明代の有名な庶民児童用高級教材として《幼學故事瓊林》がある。管見によればこの書物は《兔園策》の系譜に連なり、宋代の《幼學須知》の後継書であることは既述したところである。程登吉（字允昇、西昌人）の原著に成り、清代に鄒經脉が増補注釈を加えている。この書は各地に伝えられ長期に亙り盛んに使用され、だれもがよく知る啓蒙教材であり、明代から清末更に民国初期までに及ぶ長期に亙る一大流行書であった。その特徴は素材を多種の啓蒙書から広く採り、内容は広汎であり天文地理、古今往来、人情世故、家庭婚姻、生老病死、衣食住、技芸、物品制作、鳥獸花卉、神話、伝説と総てに及ぶ。また日常使用する文字は勿論、人が見聞して喜ぶような熟語故事も記載している。成語典故詞典であり、分類して検索に便利で類書としての機能を有する。

その内容の概要を本文の目次により再度示すと次ぎのとおりである。

卷一	天文	地輿	歲時	朝廷	文臣	武職			
卷二	祖孫父子	兄弟	夫婦	叔姪	師生	朋友賓主	婚姻	女子	外戚
卷三	人事	飲食	宮室	器用	珍寶	貧富	疾病死喪		
卷四	文事	科第	制作	技藝	訟獄	釋道鬼神	鳥獸	花木	

その文章を冒頭の一句で例示すると次ぎのとおりである。

『混沌初開：乾坤始奠。』音渾豚

混沌、元氣也。陰陽未分乃象。乾、天也。奠、定也。『易』太極生兩儀、

兩儀未分、其氣混沌如鷄子。盤古氏出、則天地之道、達陰陽之理。于是伏者為天、偃者為地。天尊地卑、乾坤定矣。

『釋』兩儀、天地也。鷄子、即鷄卵。

盤古猶言盤固。』

文体は四言、五言或いは七言の制限にとらわれず、短いもので八語から内容により長短それぞれで、最長は三十六語に及ぶ。偶句対句は嚴格に守っているが劃一的な押韻はしていない。本文のみで一千五百三十七句、総字数約三万である。

この《幼學故事瓊林》が明、清、更に民国初期までも、流行書として長期且つ広域的に使用された理由は何であったのか？ 勿論一つには増補、續増によって教材として時代に適應する措置を施されたこともあるが、更に根本的には対象である庶民の児童及びその父兄の需要に適切に應える内容を有していたことに外ならない。教材としての役割 庶民特に農民階層が《幼學故事瓊林》に期待したものは何であったか？

清末民国初期の《繪圖重增幼學故事瓊林》の序文は、明確にこの間の事情を記述して次ぎのとおり述べている。

「余少時往還閭里、輒聞有讀書聲自鄉塾來者。傾耳而聽之非四子書、即幼學瓊林也。」

(中略) 人生十年就外傳為父兄者。辟咄詔之、必日勤讀。讀書果何為者、

大知大用小知小用蘄於應世。而已顧幼聰者不可多得。鄉曲之家又往往迫衣食、

無培植子弟力。童蒙入塾歷四五載、無論智愚、不得令之輟學別就他業。

為日後營生計。故大知大用非所望也。但得目識三五千字、耳塾古今典故千百條、

以之應世亦已足矣。讀幼學一書大知不足、小知有餘。(以下略)

即ち、

「自分が若いころ郷里へ行きかえりすると、村の塾から讀書の聲が聞こえてくる。よく聴くと、それは四書ではなくて幼學瓊林であった。(中略)

十歳で家を出て職に就き父兄の手助けをする境遇の者が、礼儀正しく毎日讀書に努めている。讀書は一体何のためするのか。大局的な知識から日常的知識まで処世に必要な知識を如何に用いるかを知るためである。

幼少から聡明な者は減多にはいない。都会から遠い農家は衣食にも窮し、とても子弟を食べさせ教育する余裕はない。村塾に四、五年間入学させれば、勉強の出来不出来にかかわらず、退学させ農業以外の職業に就職させ、その後の生活のための仕事が出来るようにするのが精一杯やれることである。それ故高遠な知識と用法等は元來望むころでない。

ただ、三乃至五千字の読み書きが出来ることと、古今の典故を百ばかり記憶すればそれで処世に十分である。《幼學瓊林》の一書を読めば大知は不足するが、小知は十二分に得られる。

(以下 略)

これに見るとおり極めて具体的に、農村児童の教育環境と親元を離れて他郷に職を求めて離農してゆく状況、更にそうした児童でも最低三千から五千字の読み書き能力と故事の出典百程度は常識として必要としたことを述べている。《雑字》《百家姓》《千字文》の類では到底こうした期待には応えられない。啓蒙類書である《兎園策》の系譜、《幼學須知》の後継書と考えられる《幼學故事瓊林》が流行した所以である。

次に幼學須知を冠するもう一つの教材である《幼學須知雜字采珍大全》について検討することにする。その内容を要約すると、既述した挿絵入り総字数四百足らずの《雑字》の高級書であり、対象とした事物の用語は三千三百六で、挿絵はないが必要な場合注をつけている。例えば時令類の『八節』には「立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至」との注がある。本文総字数は約七千、左記の如く四十八に分類した字書である。(清末版 増訂幼學須知雜字大全による、括弧内は用語数)

天文(九四) 地理(一二六) 時令(六七) 人物(一七三) 歳寿(一八)

文官(一三九) 武職(六六) 仕官(三六) 士業(五一) 百工技芸(五七)

商賈(五〇) 山海異類(四一) 番国(五六) 身体(二六) 病症(九一)

人事(三二) 婚姻(一四) 喪祭(五〇) 冠冕衣服(二〇) 金銀首飾靴鞋(四九)

女工(二三) 糸布(四五) 綵色(四二) 數目(三三) 訟獄(一一) 宮室(一〇六)

釋道(三〇) 木器(四八) 鐵器軍器(八五) 寶貝(三三) 雜貨(六〇) 花草(五六)

竹木(五一) 藥材(八五) 五穀(三六) 蔬菜(三五) 菓子茶料(五六) 茶酒油類

(二四) 菓食(三二) 素食(二〇) 飛禽(四二) 走獸(四七) 鱗介(一一四)

昆虫(三八) 魚獵(二六) 船隻(六一) 通用(二九二) 俗語(二四三)

『雑字』とは本来古文の音字、逝字等難解な文字を解説する文字學、字書である。溯れば書目としては隋書經籍志卷一に《要用雜字》三卷、《雜字要》三卷、《雜字音》一卷。唐書藝文志卷一に《雜字書》八卷。太平御覽經史圖書綱目に《雜字詰

訓》《周氏雜字》が見られる。こうした古書についての解説を挙げると清の錢大昕の《十駕齋養新録》の卷十三に『周成雜字』の考証があり、具体的解説としては翟灝《通俗編》卷三十六雜字が具体例を列挙している。しかし、それは読書人の領域のことであり、庶民教育の次元では庶民の識字水準から難解であるとして、本来の意義を流用して《雜字》と称していると言えよう。しかし、ともかく字書であることには間違いない。

〔第一表参照〕

これまでの考察から《幼學故事瓊林》は「類書」であり、《幼學須知雜字采珍大全》は「字書」の系統に属する。その相違を天文類の天地の例で示すと次ぎのとおりである。

《幼學故事瓊林》

〔第二表参照〕

本文 『氣之輕清上浮者為天。氣之重濁下凝為地。』

注釈 (説文) 天地者陰陽之府也。神者天之陽精。鬼者地之陰氣。天統開于子、

輕精之氣、一萬八百年、浮而為天。天之精華、凝結而為日月星辰。成象

既著。功用乃行。地統開于丑、重濁之氣、一萬八百年、凝而為地。地之

靈氣、融結而為山川河岳。成形既定、肝蠻攸召。

(釋) 氣、元氣也。凝、結也。

《幼學須知雜字采珍大全》

本文 『天地』

注釈 (陽氣輕上浮為天陰氣下重濁下為地)

これで何故同じ『幼學』を冠しながら、前者は《故事》であり後者は《雜字》である所以が確認出来る。本文字數も含めて勘案した場合、それが識字を主とした字書という用途の相違があるとしても、前者に比較して後者は教材としての程度がやや低いと判断される。類書である《兔園策》、その後継書と目される《幼學須知》という庶民児童用高級識字教材の系譜としては、直系の範囲外であり傍系として位置づけるのが適当であろう。

むすび

これまでに村書《兎園策》を採求して確定し、それが庶民児童用高級識字教材として位置付けられるものであり、更にその系譜は九世紀の長きにわたり《幼學須知》更に《幼學故事瓊林》と流れ、農村児童の農業以外での職業、特に商工業への就職に必要な処世の知識を習得するものであることを明らかにした。

従来の児童教育の識字教材論に於ては、ややもすれば《蒙求》《千字文》等の初級識字教材の論議が主であり、希に庶民児童に関するものがあつても《雜字》《百家姓》《三字經》等の所謂「村書」の範圍に終始する憾みがあつた。

五代、宋代、元、明、清と經濟的成長の過程で商業發展の果たした役割は非常に重要なものがある。その担い手としての商人の教育・教養の基盤を形成した《兎園策》系統の程度の高い識字教材の持つ意義は、評価され認識されて然るべきと思うのである。

ところで、これまでの識字教材概観から判断される庶民児童の『識字能力』の水準は、五代以降を通して見た場合、時代の経過と共に量的には変動があるものの、質的な層としては大略次ぎの如く総括されると考える。

第一類 最低文盲層 識字教育に無縁な貧農、流民、都市の労働者、零細行商人、芸人等社会最下層階層の児童であり女子を含めて圧倒的多数を占める。

第二類 低位層 陸游の所謂「冬學」に就学した農民児童、都市の下層市民児童であり、《雜字》《百家姓》を使用しての習得率を五割とすれば識字数は二百前後である。自己の姓名、居住地の地名、日用品名等は読み書き出来る程度。

第三類 中位層 自作農、中小商工業者の児童で《千字文》《蒙求》等の習得者であり、識字数一千前後、実用的簡易な文章は読み書き出来る程度。

第四類 上位層 小地主、商工業者の児童で高級「村書」の教育を受け、識字数は三千前後であり、官の布告文、商業文その他の実用文書は理解し書簡も書くことが出来る階層である。しかし比率的には四類のうち最小であつた

と考えられる。

第四類は庶民文学の発展に関係する。この階層の識字能力があれば必要に応じ識字教材以外に、詩を鑑賞するための「村書」である《千家詩》(⑩⑪)を村塾で誦讀したのであろうし、明代以降は史書として曾先之の《十八史略》も誦讀したのであろう。勿論読書人とは比較するすべもないが、この階層なりの古典的教養への志向を見ることが出来る。経済的發展は次第にこの層を量的に増大した。明代の『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』は講師によらない小説として、読者の存在を前提としている。更に『三言』『二拍』の如き白話体が出現して来る。こうした作品の作者は科擧に落第した士人や下級読書人であり、読者にはそうした知識人層を含んでいたにしろ、大多数は第四類の児童の成人した庶民階層であり彼らの存在こそが庶民文学の基盤を形成し發展させたと考ええる。庶民の社会や文化の歴史に於ける程度の高い「村書」の果たした役割を再度強調するものである。

なお、本稿は教材論としては専ら識字教材論に限定したものであり、『読み書き算盤』のうち算数教材には論及しなかったが、『算盤』即ち計算能力の問題は極めて重要であり、いずれ計算用具を含めての庶民児童算数教材論として別途小論にしたいと考えている。

⑫

- ①和田 清 『歴史上より観たる支那商人の位置』《史学》二九―二、一九五六。
- ②John W. Chaffee 《The Thorny Gates of Learning in Sung China》Cambridge U.P. 1985
- ③余英時《中国近世宗教倫理與商人精神》聯経出版 中華民國七十七年。
- ④磯波 護《馮道》中公文庫 昭和六十三年(一二四頁)。
- ⑤《雜字》本来の語義は、本稿四《兔園策》の系譜にて再述。
- ⑥清水 茂《中国目録学》筑摩書房 一九九一年(三三頁)。
- ⑦尤表《遂切堂書目》は《兔園冊府》を《修文殿御覽》以下の類書類に区分している。

⑧ 近藤春雄《中国学芸大事典》大修館書店 昭和五十三年（七三八頁）

「清の馬國翰が佚文を集めて玉函山房輯佚書小学類第七十五冊に収めている」

⑨ 沈括《夢溪筆談》卷九人事 杜五郎の条

⑩ 宮崎市定《科擧》中公新書 昭和三十八年（十五頁）


⑪ Ho Ping ti

«The Ladder of Success in Imperial China Aspects of Social Mobility 1368~1911»

Columbia U.P. 1962

⑫ 前掲《中国学芸大事典》（四四五頁）

「村塾で童蒙の誦讀に用いた詩の本。宋の劉克莊に分類纂唐宋千家詩選二十二巻があり、近体を収めているが後世行われているものは、明人の増刪したものである。」

	手		杓
	脚		甌
	身		鍋
	眉		盆
	頭		眼
	鬚		耳
	口		鼻
	指		舌

通俗編卷三十六

雜字

雩 爾雅釋天注江東呼蝶螻為雩音義云雩于句切按

今俗呼蝶螻若候或若吼丹鉛錄田家雜占俱因候音作鸞湖壩雜記因吼音作蛻而鸞為閩海水族之名蛻則蚍蜉也與蝶螻何相涉耶俗音蓋本于句之切而讀句若殼若大雅敦弓既句之句耳

澤 楚辭九思霜雪兮灌澧水凍兮洛澤澤音鐸今呼簷

水為澤是此字

趨 說文走意蘇和切歐陽炯詞荳蔻花開趨晚日是也

楊維禎遊仙錄言日姪西从夕旁非

徽 音眉說文物中久雨青黑博雅敗也楚詞九歎顏徽

青年模範卷一

孝悌之道 跪讀父書 樂有嚴父 虎舍孝子 袖甘奉母 閨門介壽 奇女復孀 節孝雙奇 敬愛盡誠 兄弟赴義 萬里尋兄 分產不較 布衣貴介 鹿車歸里 替女完婚 姑嫂成名 和睦妯娌 救夫盡節 展謁祠墓 施貧活族 戚里言歡 德行化人 主善為師 不忘死友 篤念故舊

釋故事白眉

總目 職官類 人道類 方外類 人品類 交際類 德器類 庸劣類 文學類 人事類 吉慶類 仕進類 總目錄

精校重增繪圖幼學故事瓊林卷一

西昌程允升先生原本

清溪謝梅林硯備

霧閣鄒聖脈梧桐增補

男 鄒可庭涉園

古越蔡邕東藩續增

天文 新增文十一册 續增文十册

混沌 音單 初開乾坤始奠 混沌元氣也陰陽未分之氣乾天也坤地也莫也

氣之重濁下凝者為地 地之通達陰陽之理於是伏者為天仰者為地天尊地卑

謂之七政天地與人謂之三才 氣之輕清上浮者為天

之宗月乃太陰之象 日月星辰之精

虹名蟬蜩乃天地之淫氣月裏蟾蜍

朝廷諸侯大夫之類也 比象刑罰之義列之